［4］「書く」力をつける実践

(1) 取り組みの基本的な考え

中学部の書く実態を見ると、個人差が大きい。例えば、文字を読みたいという気持ちはあるが読めないしなぞり書きがやっとできる生徒、平仮名は読めるが書くことになると一部の文字を不正確に覚えていて読む人に伝わらない生徒、平仮名・片仮名の読み書きができ自分のしたことを自分らしい表現で文に書くことができるが、思ったことまでは詳しく書くことができない生徒、平仮名・片仮名・生活に使う漢字はマスターしているが文章表現が苦手で型にはまった表現しかできない生徒、思ったことをどんどん書くことができるが、文の内容を構成して書くことができない生徒等さまざまな実態がある。どの発達段階の生徒であっても生徒の将来の生活が楽しく意義あるものになるためには書く力をつけることが大切と考え、「書く」力をつけたい力として取りあげた。また、好きな本や漫画・料理や地理の本・時刻表や看板などが読めることによって書きことばを学んだり、生活の中で読むことの便利さが分かったりして書くことにもつながってくる。「書く」力がつけば、次に述べるように、生徒の生活が広がったり、便利になったり、自分を見つめて自分づくりができたりしてくるのではないかと考えた。　次に書く力をつけると、どんな生活ができるようになるのか具体的に述べてみる。

○手紙・交換日記を書いて自分の思いを人に伝えたり、リクエストのはがきを書いて、聞きたい曲をラジオで聞くことができる。

○就職のとき、履歴書を作成する場合、名前や住所が自分で書け、生活に便利である。

○生活場面で必要なことをメモすることができ、生活に役立つ。

○書くことで、自分を見つめることができ、自分の気持ちや感情を記録に残しておくこともできる。

このように、書く力をつけることは、生徒にとって大切なことである。

そこで中学部では、「書く」力をつけることをねらいとして、日常生活の指導・生活単元学習・課題学習等の学習の中に位置づけて実践してきた。

(2) 指導の方針と手だて

【指導の方針】

①日常生活の指導・生活単元学習・課題学習を通して、できるだけ適切な場面をとらえて指導に当たる。

②文を正しく書くために、基本的な表記法・文法などの学習を課題学習の時間等を利用して個別に応じて学習指導する。

③日常の会話においても、単語の羅列でなく、文としてのまとまりのある会話ができるよう配慮する。

④学校生活のみならず、家庭との連携を深め、書くことの機会を増やす。

以上のような指導の方針を立てて、書くことの指導に当たった。

【指導の手だて】

	実施時間	単元・学習内容	書く場面と生徒の活動	教師の意図と支援
生活単元学習	3･4 校時 週12時間	・１年生を迎える会 ・校内宿泊学習 ・学部遠足 ・校外学習 ・運動会 ・大山宿泊学習 ・附養文化祭 ・お楽しみ会 ・文集作り ・３年生を送る会 等	・行事の計画をたて表にまとめる。 ・準備のために親へのお願いや連絡をする ・自分達の活動に参加して貰うために親や交流校の友だちに招待状や挨拶文を書く ・行事が終わった後に自分達の活動はどうであったか反省文を書く。 ・思い出として作文を残す。 ・料理の学習において料理の本を見て調べ表にまとめたりレシピを作ったりする。 ・校外学習の見学先を調べて書く。 ・見学内容や感想等の報告文を書く。	・生活単元学習は年間を通して、生徒の生活に密着した学習内容を盛り込んでいる。学習活動のあらゆる場面で書く力は必要であり、また書く実践を積み重ねることにより書く力を高めることができると考えるので機会を逃さず、生徒が必要性を感じながら書く場面を多く取り入れていく。 ・書く内容や文字の大きさ、用紙の大きさ、紙質、書く用具（鉛筆・マジック・ボールペン）は学習内容によって適したものを用意する。
日常生活の指導	朝の会 帰りの会	・日記の発表 ・連絡ノートへの記入	・朝の会では、家庭学習として書いた昨日の日記を皆の前で発表する。 ・教師が連絡黒板に書いた、明日の計画・予定・準備するもの等を書き写す。 ・今日の一番心に残ったことを、「一言感想」として生活ノートに書く。	・日記は毎朝点検し一言感想を書いて生徒と共感する。 ・連絡ノートは必ず目をとおして、一言感想を書き添えたり、表記の間違いを訂正したりして指導している。また日記は個に応じた形式にする。
課題学習	火～金曜日の9:05～9:25	・漢字指導 ・平仮名、片仮名 ・なぞりがき	・自分の課題と学習方法を理解して取り組む。 ・個別でプリントやノートに書く。	・個々の生徒につけたい力を見極めて実態に即した課題と目標を明確にしていく。 ・生徒が主体的に取り組めるよう、個々の実態に応じて、プリントやカードを所定の場所に入れ、自由に取り出して使用できるようにしておく。 ・できるだけ理解しやすいように、教科書・プリント・カードなど視覚に訴える教材を用意する。
	毎週水曜日の 5校時	・音読 ・視写 ・文字の書き方 ・文法、表記法	・教師の後について一斉読みをしたり、指名読みをしたりする。 ・教師が黒板に書き、生徒はプリントに視写する。 ・平仮名、片仮名、漢字の練習をする ・句読点の打ち方、接続詞の使い方、敬語の使い方、助詞の使い方を学習する。	

表－12　(3)書くことの指導計画　　中学部２年

		4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
生活単元学習	単元名	１年生を迎える会	学部遠足・宿泊学習	校外学習	報告会	運動会	大山宿泊	附養文化祭	お楽しみ会	文集作り	お楽しみ広場	３年生を送る会
	作文 ＊思い出として残す		学部遠足の作文・宿泊学習の作文	校外学習の作文		運動会の作文	大山宿泊の作文	附養文化祭の作文	忘年会の作文		お楽しみ広場の作文	
	招待状・手紙 ＊思いを伝える	１年生に招待状				招待状	礼状	招待状	招待状 年賀状		招待状	
	反省文 ＊自分を見つめる						大山宿泊の行動・係について		お楽しみ会の仕事について			１年間を振り返って
	文集づくり ＊思い出として残す									学校文集 学級文集		
	その他				報告会の原稿		報告会原稿	せりふ作り				
日常生活の指導	生活ノート											
課題学習		片仮名や平仮名、漢字の書き方。「、」や「。」の使い方。				主語述語の関係、修飾語と非修飾語の関係、助詞の使い方。5 W1Hを知る 。				つなぎことば、こそあどことば、敬語の使い方		
ねらい		心に残ったことを文に書く。				文のきまりを知る。				文の構成を考えて書く。		

(4) 指導の実際

＜課題学習「基本的な文作りの指導により、書く力をつけるための実践」（ 2年）＞

① 取り組みの経過

自分たちの附養文化祭に保護者や交流校の友だち、地域の方々など、多くの方々に来ていただくために、招待状を書くことになった。招待状を書くために基礎的な力をつけたいと考え、課題学習の時間を利用して指導することとした。

生徒の中には、修飾語を使った文や、ある程度長い文章が書けたりする生徒もいる。しかし、主述の照応や、助詞の使い方にあやまりがあったり、助詞を使わないで文章を書いたりする生徒、だらだらと長い文章を書くが、まとまりがなく主旨がわからない文章を書く生徒、一人で書けるが誤字脱字が多い生徒、等様々である。書く力を育てるためには読むことが重要であると考えて、水曜日の課題学習の時間に国語の教科書等の本読みを取り入れているが、一人ひとり個人読みをさせて見ると、拾い読みであったり、初めの一字だけ読んで、後の文字を推量して読んでしまったり、一度聞いた読みを覚えていて記憶をたよりに読んでしまったりと、読みに関しても様々な実態がある。

以上の実態から、２文節の指導、３文節の指導、助詞の指導、接続詞の指導など基本的な文型を指導しながら書く力をつけていく必要があると考えた。そこで「誰が何をした」というような簡単な文作りに慣れさせたり、「は」「が」「を」「に」等の助詞を正しく使って文を作ったり書いたりすることによって書く力をつけていきたいと考え実践した。以下はその事例である。

② ねらい

○助詞を使って、主語・述語の正しい文を作って、書くことができる。

③ 学習過程

学習活動	教師の支援	生徒の反応と評価
１、言葉のカードを使って短い文を作る	１、ことばのカードをたくさん準備し生徒の要求に応じて提示する	・復習なのですすんで発表することができた。
２、主語、述語をきちんと入れて文を作る。	２、絵カードを提示したり、具体物を見せて文を作りやすくする。 ○主語、述語に助詞「が」「は」「を」などを使って、１つのまとまった文が書けるようにする。	・絵カードや具体的な動きを提示したので文が作りやすいようであった。
３、文を作る。	○よくあてはまることばを入れて文作りができるようにする。 ○プリントを用意して、書きやすいように配慮する。	・自分で作る力がある生徒はどんどん作っていった。
４、自分で作った文を発表する。	４、書いた文を見て大きな声で発表したり、友だちの作った文を聞いて文作りの参考にする。	・自分の書いたものを喜んで発表できた。

④　考察

課題学習の時間に文作りの基礎である、主語・述語・助詞の使い方等を重点的に指導した後、附養文化祭の招待状を書いた。助詞を抜かして書いていた生徒は、助詞に気をつけて書いていた。また言葉の変化も見られるようになった。例えば、W男については、教師が意識して助詞を入れて言いなおすと少しずつではあるが自分から意識して、助詞を入れて話す場面も見られるようになったので、根気よく指導していくことが大切である。W男は、書く回数をふやしていくことによって、なぞり書きくを喜んでするようになった。

また、別の時間に、句読点の使い方、5 W 1Hを入れた文の書き方などの指導を取り入れたため、まとまりのある文が少しは書けるようになっている生徒も出てきた。また、M男について言うと、反省文など、自分を見つめることができる文も書くことができるようになってきた。

＜生活単元学習「ビビンバとエノキダケのすまし汁を作ろう」の実践から（３年）＞

①　取り組みの経過

3年生では、学級の生活単元学習の時間に調理実習を計画し、担任もクラスのだれも食べたことのない「ビビンバ」を作ることになった。未知なる食べ物であるが、韓国の丼だということが生徒の持っている本でわかった。この手持ちの本を使い、みんなで分担して「ビビンバ」ともう一品「エノキダケのすまし汁」を作った。思ったよりも作り方が簡単で、味もおいしかったので、家でも作ってみたいという生徒も現れた。そこで、自分たちでレシピを作り、今後の生活に役だてようということに決まった。１学期にも巻き寿司のレシピを作った経験があり、このときは巻き寿司に合うような具を一人ひとりが考えて作ったので、レシピも一人ずつ違っていた。今回は、それぞれが分担して作ったところをもう一度思い出して調理手順を書き上げ、みんなが協力して作ることにした。

②　ねらい　　調理の手順が分かるように、レシピを作る。

③　レシピ作りにおける教師の支援と生徒の様子

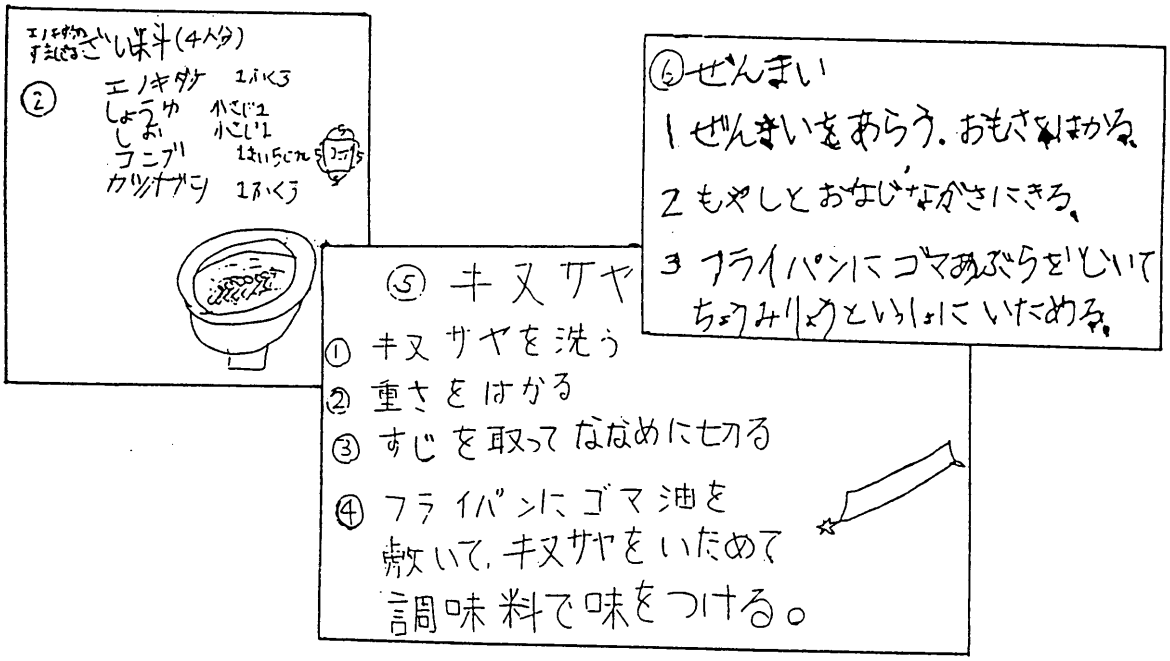
学習活動	教　師　の　支援	生　徒　の　様　子
○材料や作り方を思いだして書く。	・ 4人分の量は簡単な乗法ができ計算機の使えるＴ男がする。 ・作り方は自分が担当した材料について書くことにした。 ・読む人がよく分かるためにはどんな工夫をしたら良いのかという言葉かけをし、順番がわかるためには何がいるかということをヒントを出した。 ・箇条書きや絵、写真があると読	・Ｔ男は計算をしたり、まとめて書いたりする活動を好み、進んでこの仕事を引き受けた。 ・一度作っているので自分のしたことを思い出しながら書いた。自分がした通りの手順を書くことができた。 ・よく分からないのか、反応がなかったり自信がないそぶりが見られたりしたが、ヒントが与えられるとＴ男、Ｒ男は番号をつければよいことに気づいた。 ・Ｇ男はだし昆布の大きさを図で示し

○冊子にする。	みやすいことを手持ちの本を見ることで知らせた。 ・ご飯の炊き方や盛りつけ方法も載せ、一人でも食事の作り方が分かるようにした。	た。絵を描く生徒もいた。 ・一人ひとりが表紙に題名やカットを楽しんで書いた。

④　考察

調理をした後にレシピを作ると、自分のした活動をもう一度反芻し、それを書き残すことができる。これは、日記や作文と同じように、自分の活動を見つめ直すことで自分づくりをしていくことができる。また、読む人に分かるように、作る順序を考えて番号をつけたり、箇条書きにしたりすることで、物事を順序立てて考えたり相手の立場に立って考えたりする思考の過程を大切にすることができる。このレシピ作りでも自分の担当した所を思い出しひとつひとつの活動を確認しながら書いていく姿が見られた。家で一人でビビンバを作ったG男、母親といっしょに作ったY男など、すぐに生活に生かした生徒もいた。このようにレシピ作りは書く活動の中で思考を大切にし、生活に役立つ題材である。

ビビンバとエノキダケのすまし汁のレシピ



(5) 反省と今後の課題

書く力をつけることが大切であることを教師も生徒も自覚して、意図的に書く機会を作ることが大切であるが、個によってはなかなか文字の習得が困難な生徒もある。生徒の実態によってはワープロ等を使って、自分の思いを伝えることができればと考えて、実践してみたところ、自分の思いがすぐに文字となって表れることに興味を持ち、進んでワープロに向かおうとした。また、パソコンの使用にも興味を持ち、バスの待ち時間にはすすんで向かうこともある。このように、楽しいことを通して書きたいという意欲を生徒がもつように教材・教具を工夫したり、題材を選定したりしていきたい考えている。やはりいろいろな工夫を重ねて、生徒が自発的に書こうとするような指導法を工夫していきたいものである。

（井上早苗）